

●第1部

<司会>

高井：お待たせいたしました。ただ今から研究倫理研修会を開催いたします。本日の司会を担当いたします倫理委員会委員の立教大学の高井です。よろしくお願いいたします。限られた時間ですので、運営につきましては皆さまの協力をぜひお願いしたいと思っております。なお、今回は会場の皆さんとのやりとりはない予定ではありますが、そうした場合は、聴覚に障害のある参加者の方がいらっしゃいますので、必ずマイクを使ってお話ししていただくこと、マイクを乱暴に扱わないということ、はっきりと大きめの声でお話ししていただくこと、マイクで口元を隠さないことをお願いしたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。では、まず始めに、本学会副会長で倫理委員会の村田委員長より学会の倫理規程に関する報告についてお願いいたします。

<倫理規程に関する報告>

村田：それでは皆さま、改めましてこんにちは。ご紹介いただきました倫理委員会の村田でございます。研修に先立ちまして、この場をお借りして少しの間、倫理委員会についてのご紹介をさせていただきます。

倫理委員会は、研究倫理と、ハラスメントも主要課題にしております。ハラスメントについては9月の学会の研修で予定をしておりますので、本日若干倫理委員会の流れとそれから今日、配布をしましてこのたびホームページにアップをさせていただきました倫理委員会の規定と、それからそれに関わる付属の資料について若干ご紹介をさせていただきます。まず、本学会において、具体的なハラスメントにおける事案があったと聞き及んでいるんですけれども、そうしたことを契機に2017年にハラスメントに関するワーキンググループというのを立ち上げております。このワーキンググループの立ち上げを踏まえまして、2012年の10月に倫理宣言を出しました。倫理宣言については、本学会のホームページにアップをしておりますので、ぜひまたお読みいただきたいと思います。

その倫理宣言を生かすような形で2014年に倫理委員会を設置いたしまして、今日まで及ばずながら倫理に関する研修会を開催してきました。特に、皆さまのお手元に倫理委員会として2種類のペーパーをお配りしております、1つは倫理委員会規程(以下、倫理規程とする)というものです。もう1つは長くなりますので「検証処分を受けた会員」というふうな文章の名前にさせていただきますが、その2つについて2015年の大会で実にご承認をいただきまして、倫理委員会として倫理規程を制定したという日付にしております。で、その場で広く会員にこの倫理規程の内容を周知するための努力を図るということで具体的には、ホームページのアップが大きな懸案事項であったのですが、今年やっとホームページのアップ、掲載に至りました。一番大きな理由は、特にこの処分を受けた会員ということに対する学会としての振る舞いを書いた文書化、そういったもの

を巡る議論、これは秋に少し具体的にご紹介をしたいと思いますが一番の目的はこんなふうに倫理規程に書いているんです。そこだけを最後にお伝えして、私のごあいさつを終わらせていただきたいと思います。「本学会会員の研究、教育、学会活動における不正な研究や差別、ハラスメントの防止に努めるために設置する」ということですので、あくまでも、今申し上げましたように、処分が目的ではございませんので、防止ということが大きな目標、目的でございます。特に研修に関しては、近年、非常勤とか、あるいは特任の不安定な職の元で働く研究者が増えておりまして、とりわけ研究倫理も含めて倫理の研修、あるいはそういったことに具体的に触れる機会が少ないという学会内の声がありまして、今日も研究、倫理の研修内容として開催させて、設定させていただいた次第です。

それでは、この後高井会員の進行によりまして進めてまいりますので、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

<司会>

高井：村田委員長、ありがとうございました。それでは今回の研修会の趣旨、また流れについて簡単にご説明いたします。社会教育における研究調査では、社会教育施設や NPO など市民社会組織、市民運動などの実践の場に出向き、市民や職員を対象にしたインタビューやさまざまな調査を行うことがあるかと思います。そうした場で「研究者は、現場の人たちにどのように思われているのだろうか」ということを考えてみたいと思っております。交流があれば、衝突や葛藤もあるのではないかと思います。今回の研修会では、研究と実践の間に生じるコンフリクトをテーマに、研究者が保持するカテゴリーや認識枠組みを現場の人に押し付けるようなカテゴリー化の暴力の問題に焦点を当てて、研究者と現場の双方がどのように対処すればそうしたコンフリクトを解消できるのか、その解決の糸口を探ることを企画いたしました。

第 1 部は 30 分ほどですが、若者支援を専門とする NPO の共同代表である講師の滝口さんから研究者に対する思いを語っていただきます。また、第 2 部では、対話形式によります質疑応答を含めた 3 者の鼎談（ていだん）を行っていきたいと考えております。第 2 部も 40 分ほどの限られた時間ですので、お手元に質問用紙があるかと思います、これを活用していきたいと思っております。ご質問やまた皆さまのこういったフィードバックや調査などでの体験でのいろんな葛藤、コンフリクトなどがありましたら、ぜひお書きいただければなと思っております。講演の終了後、5 分間ほど書く時間を取りたいと思っておりますので、その後回収、また鼎談の中でも回収させていただきたいと思っておりますので、たくさん出していただければなと思っております。

それでは、これから第 1 部、講演に入ってまいります。講師は、年報の第 60 集の『社会教育研究における方法論』の中にも、今回のテーマについてお書きになっていらっしゃる、「ぷらっとほ一む」の共同代表の滝口克典会員にお願いをしております。テーマは

「調査される側の人びとは調査する側の人たちをどう見ているのか？—ある若者支援 NPO の経験から—」ということでございます。では、滝口会員、どうぞよろしくお願いいたします。

<講演>

滝口：改めまして、「ぷらっとほ一む」共同代表の滝口と申します。よろしくお願いいたします。

今、ご紹介にあったように、調査される側として今日は、私たちの実践の現場に研究をしている方々がどうやって入ってきて、それをわれわれがどう見ているのかというような観点で報告をさせていただこうと思っておりますが、私自身も実は半分は研究者というか、研究をして論文を書いている立場なので、今日は私がお話しする話は、私が別のフィールドに入ったときに、全部こう跳ね返ってくる話というか、一方的に批判するというよりかは、日々自分もそういう問いの中にいるという立場なんですけれども、ただ今日は、そういった立場性をあえてはっきりさせるということで、今日の私の報告は調査される側、実践現場の側から基本的にはお話をしたいと思います。

スライドに則して、まずどんな活動なんだというふうなところから簡単に見ていきたいんですけれども、皆さんのお手元にこういうイラストが描いてあるシートがお配りしてあると思います。「ぷらっとほ一む」という若者支援の NPO で、NPO です所以ミッションがあります。孤立しがちな若い世代、不登校やひきこもりの子たちが、その 1 つの分かりやすい例ですけれども、それ以外にもさまざまないろんな困難を抱えて孤立している若者たちが集まってきて、一緒に学んでいけるような、そういう居場所づくりをするというのが、私たちのミッションです。で、山形市内に拠点を構えて 2003 年から活動をしてまいりました。後で触れることもあるかと思いますが、ちょうど今年度で解散する方向で、今、解散手続きのほうに入っているような、そういう活動です。

15 年間の活動でした。で、だいたい 20 代から 40 代の 10 人ぐらいの若者たちで運営しているような形で、そこに年間だいたい 2,000 人ぐらい、いろんな人が関わっているというふうな形です。で、具体的に活動のイメージを最初にざっと共有しておきたいんですけれども、活動の中心は、右側のほうの、外観があの建物です。3 階の所がまるっとフリースペースになっていて、そこに、水、木、金、土に開放して、いろんな人たちがやって来て交流すると。その中から見た写真が左側の写真です。これはちょうど昨日、全部きれいに掃除をして撤収したところで、いろいろ感慨深いものがあるんですが、そういう場所を運営してきました。ここに、不登校、ひきこもり支援というと、悩み相談に来て、いろんな相談ごとをしているようなイメージを持たれることが多いんですけれども、基本的には来た人たちがおしゃべりをして、いろんな交流をしている、笑い声が響いていると、そういう場所で、そこに不登校、ひきこもりの人も来ますけれども、営業の途中で寄っていくサラリーマンがいたりとか「今日は休みの日だ」という自営業の若者がいたりとか、いろんな人が来て交流していく。あの写真でも、親子連れがいたり

とか、いろんな人がちょっと写っているワンシーンですけれども、こんな感じの場所を運営しています。

概念図ですが、あの点、点、点とあるのは、街中に散らばっている孤立している若者たちだと思ってください。ひきこもりの若者とかをちょっとイメージしてもらえればと思うんですが、私たちはまず孤立している若者たちがいつでも来られる、つながるような居場所ということで、街中にフリースペースを開きました。で、ここに「どうぞ」というふうに PR するわけですが、よく分かんないわけですね。「何だ、それ？」というふうに当事者の人たちからは思われる。そんな「来て」と言ったって「誰がやっているか怪しい場所にいけるか」となるので、なかなかフリースペースがあるだけでは、そこにいろんな人がつながってくるということにはならない。なので、そこからどうやって周辺の孤立している人たち、この周りの点の人たちにアウトリーチするかというのが課題なんですけれども、よくひきこもり支援というと、当人の元にスタッフが訪問支援をする、訪問指導をするみたいな、直接スタッフが出掛けていって引き出してくるみたいなケースがいろいろ問題になったりしますが、私たちはそれが危険だなと思ったので、いきなり本人のところに行くとかはやらずに、孤立している人たちの近くにもう少し参加しやすいようなテーマ型の場を開いて、それを「テーマ・コミュニティ」というふうに呼んでいるんですけれども、そういう居場所を、彼らの近く、彼女らの近くに運ぶというふうな形で活動してきました。

どんな「テーマ・コミュニティ」を運営してきたかという、例えば「不登校」というテーマで親御さんとかが集まりやすいような、街中の中心じゃなくて、周辺部というんですか、周辺部のコミセンとか公民館とかでそういう場を開く。そうすると「うちの地域の公民館だからちょっと行ってみようか」みたいな形で、自分の近所なので気軽に相談に来るみたいな形がおこって、そこでいろんな学習なんかもしていく。学習の成果はこんなふうな冊子にまとめるということをよくやっていました。この右上のやつです。

で、いろんなテーマでこういうコミュニティができるんですけれども、先ほどのこの最初のちらしを見ていただくと、真ん中のフリースペースの所からいろんな「テーマ・コミュニティ」が派生していますが、フリースペースでいろんなおしゃべりをして盛り上がる。「今、こんなことを面白いと思っているんだ」とか「こういうことに困っているんだ」みたいな話にフリースペースの中でなっていくので、それを拾って、いろんな社会資源とつないで場をつくっていくという形で「テーマ・コミュニティ」を経ていくんですけれども、山形市は映画の活動が非常に盛んな街で、市民の自主上映とかが非常に活発に回っている街なんです。で、その中で地元の映画館と一緒に、共同で自主上映会とかをやってきて、それで沖縄戦のドキュメンタリー『ひめゆり』という映画を何度かその箱を借りて上映するみたいなことをやってきたんですけれども、最終的にはそういう学習の結果、自分たちで、修学旅行じゃないですけれども、沖縄まで行って現地を学んでこうというふうな形になると。その時に作った記録集の冊子が、こんな冊子をい

ろんなテーマで同時並行でたくさん出しているの、参考までにお配りさせてもらいました。

または、「まちあるき」とかをやったりとか、その中で街のいろんな資源とつながったりといったことをやってきました。で、こんな活動です。特定の既存の分野、福祉とか社会教育とかいろんなところの縦割りの分野分けがあると思うんですけども、その特定の分野になかなかぴたっと当てはまる活動ではないというのがわれわれの特徴だと自己認識しています。

ここから少し飛ばします。今日の本題はこの後のほうで、すみません。居場所を私たちがどう捉えているかということモデル化したやつがここで書いてあるんですけども、本編はこちらです。こういうよく訳の分からない、捉えどころのないというか、どう捉えたらいいのか、自分たちもよく分からない。で、私たちのところに関わってくれたいろんな分野の研究者の人たちもよく分からないというふうな。これをどういうふうに捉えるかみたいところで、いろんなコンフリクトが起きてきたというのが、私たちの経験です。それを論文のほうでも書かせてもらったんですけども、「カテゴリー化の暴力」という形で捉えてみたところ。

これはどういう問題かというと、特定の制度的な文脈を持っていない。元々、不登校支援というところからスタートした活動なんですけれども、不登校の子どもたちに居場所をつくるみたいな、最初に自分たちがとりあえず持っていたストーリーがあったんですけども、そのストーリーそのものにも違和感を覚えて。別に不登校の子だけじゃなくていいじゃないかというふうなところで、不登校の子というふうに最初に設定していた対象者、カテゴリーみたいなものを取っ払っちゃって、「ぷらっとほ一む」をスタートをする時には「誰でもどうぞ。来たい人が自由に来る居場所」という形で活動を始めていったんです。なので、制度的な文脈みたいなものがあまりないところで、自分たちでこういう活動をつくってきたという形なので、はじめのころから「自分たちは何者なんだ」という、自分たちがどこの文脈にぴったり当てはまるのかということ結構、アイデンティティ・クライシスじゃないですけども、はじめからそういう状況で、どこに自分たちのアイデンティティを求めるのか、どこにその文脈を求めるのか、どこが一番しっくりくるのか、みたいなことをずっと考えながら、それを探しながら活動してきたというふうな形です。その中で、いろんな人たちが私たちのところに来て「それは社会教育だね」とか「それは地域福祉だね」とか「それは若者文化実践だね」とかいろんな名前を付けてくれた、そういう状況です。

その時に、よく生じたのがこの「カテゴリー化の暴力」というふうな問題。研究者とか、あと研究者だけじゃなくてメディアもよくそういう形の暴力を振るう側面があると思うんですけども、元々彼らが持っていたカテゴリー、先ほどの社会教育というふうな、戦後社会教育のストーリーみたいなものがあって、それを例えばわれわれの団体のところに来た時に「あなたたちの実践は社会教育の流れの中でやってきたことだね」とい

うふうに、そのカテゴリーをわれわれのところに当てはめる。で、それを現場に、現場というか、彼の本来のフィールドに帰った時に「あそこにある「ぷらっとほ一む」というのは社会教育の実践だった」みたいな形で報告するみたいな、そういう感じ。今のは「例えば」の話です。実際にそういうことを社会教育からされたかどうかというのはまた後で言うんですけども。そういうことが、しばしばいろんな分野の方々からそういうカテゴリー化をされた。これはどうなんだろうというのが、私の問題意識の一つでした。で、研究とか、今回ここでは研究でいいと思うんですけども、もう少し広げると研究とかメディアというものと活動現場の間でのそういうコンフリクト、カテゴリーのコンフリクトみたいなものをどういうふうに捉えたらいいだろうというのが私の一つの問題意識というか、興味関心のポイントでした。

先ほどの最初の説明の中で、この分科会というか研修会の問題意識の中で、「コンフリクトをどうなくすか」というふうな表現があったような気がするんですけども、コンフリクトは多分なくならないと思うんですよね。なくなれないし、なくさなきゃいけないものかというふうなところも自分の中ではあって、むしろコンフリクトみたいなものをどういうふうに、より生産的に活かすかということを考えたほうがいいんじゃないかということで、実際にその活動現場の側、そういうカテゴリーを当てはめられる側、われわれの側でそのカテゴリー化みたいなものをどういうふうに捉えて活用してきたかということを考えて、少し整理をしてみました。というのが次のスライドです。

多分カテゴリー化をされたときに、現場が反応する反応の仕方は幾つかパターンがあるなと思ったんですけども、一つはシンプルに「それはちょっと違うんじゃないか」というふうに、そのカテゴリー化に対して抗議をする。「それはちょっと駄目だよ。暴力だよ」というふうに異議申し立てを行う。本人に言う場合も、あまりないかな。本人に言うというよりは、公共空間に向けて「僕はあの人たちからこんなことをされたよ」みたいに告発するというんですか、そういうことをする。そんなに広報力があるわけじゃないので、自分たちの団体が発行しているメディア、フリーペーパーだとかあるいはブログみたいな場所だとか、そういう場所で「こんなひどい目に遭った」みたいなことを言うというのがだいたい最初のころの抗議の形でした。

そういうことをいろいろ学習していくと、メディアとか研究者が来た時に「この人はこういう暴力的なカテゴリー化を持ち込んでそれを押し付ける人かどうか」というようなことを現場の側がいろいろ判断する。事前に判断して選別をするというようなことをだんだんやるようになっていきます。素性を調べて「そいつはどういう調査者なんだ」ということを調べた上で「この人たちだったら受け入れてもいいか」とか「受け入れないほうがいいか」みたいなことを面接じゃないですけども、実際1回会って話して「これは受け入れないようにしようか」みたいなことを団体で話すみたいなことがちょこちょこ生じてくると。コンフリクトがあまり生じなさそうな、もっと言うと、こちら側のストーリーというか、NPOとか現場の側の物語、ストーリーとか筋書きみたいなものを

ある程度なぞってくれそうな人を受け入れるみたいなことをやっていくような段階があります。

それも私はこういう現場の活動実践をしながら研究をする立場になるので「それってどうなんだろう」という疑問も自分の中で生じてきて、ある時期から第3パターンという、むしろそういうものをどんどん受け入れて、そこで生じる「カテゴリー化の暴力」みたいなものを体験学習するような、そういう機会にしたほうが面白いんじゃないかと。その居場所の若者たちと一緒にそういう楽しみ方をしたほうが、多分われわれにとって学びが大きいんじゃないかというふうに考え方を少し変えてきて、それで研究者とかメディアとは何なのかということを実際自分たちの身をさらす。で、どんなふうに取り材されたか、その取材されたものも、例えばメディアだったら番組になって映像として流れていく。それをみんなで見て「うわ、あんな切り取られ方をしているよ」とかというふうに楽しむ、学ぶみたいなそういう教材として利活用するような、機会活用をしていこうみたいな形にだんだん落ち着いてきました。その時にどんなことをするのかというふうな話なんですけれども、この間論文で書かせていただいたことと重なるのかもしれない。そのフリースペースの若者たちにその研究者たちをいきなり出会わせたりとか、あとメディアと直接やりとりをさせるというのはちょっと危険もあるので、ある程度われわれが間に入って、支援者が間に入って媒介する、距離感を多少コントロールしてたりもしながら安全確保をしながら、「カテゴリー化の暴力」みたいなものを体験したり、観察学習したりできるようなそういう環境をつくるみたいなことをやってきました。

その機能は何かと思ったときに、2つあるかなと思ひまして。一つは一方向的にそのカテゴリー化を当てはめられて、それを誰かにどこかで書かれたというと、ひどい話なので、それについてこちらでも語る機会とか、語る場をがんがんつくっていかうと。

「あの研究者にこんなことを書かれた」みたいなことを自分たちのメディアとか、またいろんな場所で書くみたいな、そういう語る場所、書ける場所みたいなことを活動の中のいろんな場面に埋め込んでいくということをしました。今日は持ってきてはいないんですけれども、今日お配りした資料はほとんど全て、これですかね、このイラストとかもフリースペースに来た若者たちが書いてくれたものだし、この『ひめゆりの歩きかた』というふうな冊子もそれぞれの記事は実際にスタディ・ツアーに行った若者たちが書いているという形で、活動している場面の中でとにかくいろんなことを振り返って書くとか、何か体験をしたならその体験したものをみんなで語るみたいなことを日常的にずっとやっているんで、とにかく誰かからカテゴリー化をされたとしても、されっ放しにしておかないというのが一つ。

もう一つは、ただしゃべる機会をいっぱい設けてもなかなか文脈をずらせることにはならないので、文脈をずらすためにカテゴリー化されたその文脈をこちら側からどんどんずらしていくために、相対化していくために、例えば社会教育の人から何かを言われたら、地域福祉の人を呼んできて地域福祉の人に別の語りをさせるとか、歴史学の人を

呼んできて、その人に別の語りをさせるとか、とにかくいろんな文脈を自分たちのところに呼び込んで、全然別々のことを語らせる。そういう中で、解釈をとにかく揺るがしておく。「あいつらは何者か分かんないよね」というふうなことを、そういう言説環境みたいなものを何となくつくっておくということを心掛けてきました。その中で、自分たちがその文脈、文脈、場面、場面で一番使い勝手がいいものを使うというふうなそういう構えみたいなものが、こういうカテゴリー化みたいなものとの対峙の中でだんだん出来上がってきたような気がしています。

振り返ってみて、じゃあ活動現場にとって調査者は、調査者にはおそらく研究者もそうだし、メディアとかも含まれると思うんですけども「何なんだろう」ということを改めて整理しておく。まず、NPOはミッションがあるわけです。こういう目的とかこういう世の中を実現したいというミッションがあって、そのために活動しているというのがわれわれ市民活動の前提です。なので、そういう前提を持っている団体なので、そのミッションとミッションの共有、文脈みたいなもの、それをその相手方と共有できているかどうかでずいぶん話が、意味合いが異なってくるだろうということです。これは別に研究者とかメディアに限らず、行政とかと一緒に仕事をするときも全く一緒、企業と仕事をするときも一緒なんですけれども、その相手とミッションとかこういう文脈が共有できていれば、それは協働のパートナーというふうな意味合いになります。なので、お互いに自分たちの強みとか弱みとかを組み合わせ、どうすれば一番いい仕事ができるかみたいなことをその都度話し合って決めていくという感じに基本はなると思うんです。

「カテゴリー化の暴力」というものが問題になる場面というのは、共有文脈がない場面じゃないかなというふうな感じがします。共有文脈がない場合は、われわれはどうやって判断するかというと、その調査、その研究者が持ち込んでくるその調査にわれわれの活動にとっての利用価値があるか、ないかということ判断して、そこで対応が変わるんじゃないかということです。ちょっとえげつない言葉「利用価値」ですけども、じゃあ何に利用価値があるかというふうな話です。これも実際活動をしていて、こういう感覚というか感じということを書いてみたんですけども、3つあるのかなと思っていて。一つはその活動に関する意味付けとか格付け、もっと言うと権威付け、そういう言説を供給してくれる。特に大学の先生が「あそこの活動はすごいよ」なんてふうに言ってくれたら、われわれとしては最高なわけですね。われわれがどんなに主張したって、市民社会からはよく分かん。何も法人格もないし、どこかの文脈に則って、例えば行政から何かの枠組みを、制度を与えられてその枠組みの中で活動をしているわけでもない。よく分からない謎の変なサークルというふうな位置付けでずっと来た。そこに研究者が来て「この活動にはこんな意味があるんだ」なんて言ってもらえたら最高ですよ。というので、そういう価値付けとか権威付けをしてくれる存在としてまず一つ意味があるのかなと。

もう一つは広報媒体。これはメディアによく当てはまると思うんですけども、研究者の場合も、研究のこういう学会みたいな場所でそのことを話してくれれば、われわれ的にはそこから何かまたいろんな種をまいてもらえることになるので、研究もメディアも基本的には広報媒体というふうな側面が強くと。この 2 つは割とすぐ想像が付くのかなと思います。

もう一つ、これは、私が、自分が研究もしていて感じる場所なんですけれども、研究者に入ってきてもらって、これをやってもらってありがたかったなというのは、われわれが、例えばよかれと思ってやっているけれども、そこに実は結構大きな問題点があった。見落としていた穴があった。死角があったみたいなときに「ここは危ないんじゃないの？」みたいな指摘をしてもらえるのが非常にありがたい。他にもそういうネガティブな部分というわけじゃなくて、例えば活動している意味付けを自分たちでつくっているわけですけども、それと全然違う意味付けをしてもらって「あ、そういう側面もあるか」みたいに気付けた場合は、それが私たちの新しい武器になってくるので、そういう活動も死角から光を当ててもらおうというのは、それが批判的なものであろうとそうでなかろうと、非常にありがたいなというのはあります。この 3 つなのかなと、ざっくり振り返っているんですが。

上の 1 つ目と 2 つ目、これは上野千鶴子さんの『ケアの社会学』なんかでも指摘されているんですけども、近年 NPO とか市民活動みたいなのところに研究者が実際同じ市民として入り込んで、発信力とか活動の説明力みたいなものが増しているというような指摘があるんです。実際そういう側面は強いのかなと思って。この 1 番とか 2 番は、私みたいな「半分研究しています」みたいな人間が活動現場にどんどん入り込んでいる現状なので、多分 NPO の側で実装可能なんです。ところが 3 番目、これはできません。これはやっぱり誰かの力を借りないといけないということで、現場は実際調達できない 3 番目を提供するというのが、研究者が説明能力とかを持ち始めた現場と関わる時の一つの武器になるんじゃないかなというふうに私は感じていると。自分が他のところに調査に入ったり、研究をしたりみたいなのときには、それが何とかできればいいのかなと思いながら 1 つの目標としてやっているようなところがあります。だいたい時間でしょうか。ということで、ざっくりですけども、私からの報告は以上になります。どうもありがとうございました。(拍手)

<司会>

高井：滝口さん、どうもありがとうございました。コンフリクトをきっかけに何かを生み出す可能性もある、との指摘には考えさせられる思いがします。これから鼎談に入りますが、5 分間ほど時間を取りますので、皆さまのお手元にあります質問用紙に、事実確認も含めたご質問とか、また、こういった調査、フィールドワークをやっている中で皆さんご自身の体験などについても、ぜひお書きいただければと思っております。5 分後

には鼎談を始めます。質問用紙を回収いたしますので、手を挙げていただければ、受け取りにまいります。ぜひ、いろんなご意見、体験、質問を書いていただければと思います。お名前とか所属についてはお任せいたしますので、よろしければお書きいただくということで。また年代につきましても、ぜひ若い方はどう思っているんだろうかというようなことについても、とても関心がありますので、よろしければ年代にも丸を付けていただければ助かるなと思っております。

鼎談の準備を進めますので、しばらくお待ちください。お書きになった方は回収にまいりますので、手を挙げていただければと思います。特に質問については早めにいただくと、準備ができますのでお願いしたいなと思います。鼎談が始まってからも手を挙げていただければ、受け取りにお伺いします。

●第2部

<司会>

高井：それでは大変お待たせいたしました。これより第2部に入りたいと思います。3人の方によります鼎談と、対話形式によります質疑応答を行っていきたいと思っております。この3人の方をまずご紹介したいと思います。まずは先ほどご報告をいただきました滝口会員です。よろしくお願いいたします。山形大学の安藤会員です。

安藤：どうも、よろしくお願いいたします。

高井：そしてファシリテーターを務めます倫理委員会委員の、都留文科大学の秦会員です。

秦：よろしくお願いいたします。

高井：では、これからの進行は秦会員にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

なお、いただいた質問は、倫理委員会委員の辻会員と添田会員に整理していただいております。

<鼎談・質疑応答>

秦：滝口さん、どうもありがとうございました。私にとっては、滝口さんは念願がかなってお会いできた方です。私は、東京農工大学大学院の出身で2012年に「質的研究を学ぶ会」という会を発足して、若手の研究者と大学院生を中心に月に1回研究方法に関するテキストを輪読し、最近は質的だけではなくて、量的調査についても学んでいます。

その中で学会年報の『社会教育研究における方法論』が刊行されたので、これはぜひ全部読んでみようということで読みました。その中でとても気になったのが滝口さんの論考でした。どんな方だろうと。NPOの方だということで、私もNPOで活動していたのですが、調査地に行くといつもNPOの方に厳しいことを言われたので、ひょっとしたらおっかない方なのではないかな、怖いもの見たさで滝口さんに会いたいなとこの企画が念願がかなって成立しました。実は「事前に読んできてください」ということで宿題にさせていただいたので、会場のみなさんはお読みになっていらっしゃると思います。

けれども、安藤さんが滝口さんの論考に登場されるということで「これは安藤さんも呼ばなきゃ」というふうに思いましてお声をかけました。安藤さんがどういう関わりをされてきたのかということをもっと知りたいなと思いましたので、安藤さんから自己紹介を兼ねて簡単にしていただければなと思っています。その後に、滝口報告を受けて、コメントをいただければなと思っています。安藤さん、どうぞよろしくお願いいたします。

安藤：皆さま改めまして、山形大学の安藤でございます。今日、ここで秦会員のほうから声が掛かった際に、安直に引き受けてしまったんですけれども、もしかしたら役が決まっていたのではないかとということで。私は搾取的な研究者で、搾取された滝口さんに糾弾される会なのかというふうな、そういう構造になっているのではないかとというふうなことを、これはまずいなというふうに思いました。それで、むしろお手元に年報のほうをお持ちの方がいらっしゃれば 143 ページを出していただければというふうに思いますけれども、そこに私がぶらっとほ一むをどういうふうに見ているかというところが、ぶらっとほ一むが 2014 年に出しました『ぶらっとほ一む入門 2014 ぶらほの使いかた！』というそちらのほうに私が書いた引用があります。読んでみます。お手元にない方もいらっしゃると思います。「例えば、社会教育の研究者は次のような言葉でぶらほを語っている」ある社会教育のと言っておきながら安藤耕己と真ん中に載っているんですけれども「ぶらほは、筆者の研究課題となる若者の「居場所」のモデル、そのひとつである。ここでは、ストレンジャーが次第にセンターに移動していく正統的周辺参加のプロセスを、初訪問以来、数年間の間においても確認することができた。スタッフの「意図的な無意図性」の発現も垣間見られたと思う。また、加えていえば、「ぶらほ」は、あえて法人格を取らない NPO のモデルのひとつとしても筆者の中に位置づいている。次はここで何がしかけられるのか。研究者／私人としての筆者はどのように値踏みされているのか等々、油断できない。それが筆者にとっての「ぶらほ」であろうか」ということで、この題名は「油断できない」というそういった題名にしてあります。どういうふうに値踏みされているのかという、常にびくびくしながら通っている場所というふうなところがこのぶらっとほ一むという位置付けだったのではないかなというふうに思います。そういうことが先ほどの 16 枚目のスライドでも裏付けられたというふうに思っております。

ということなのですが、さて、滝口さんと私が最初に出会ったのが、実は日本社会教育学会でした。2010 年の 9 月、神戸大学でのラウンドテーブルで、今、亡くなってしまいましたけれども、新谷周平さんのラウンドテーブルだったと思いますけれども、そちらのほうで初めて出会ったということになります。私は 2010 年の 8 月から山形大に着任していますので、その山形の若者支援の NPO をやっている人と県外で知り合って、それで山形でやっているんだと聞いて「まあ」ということで、それで実際にいろんな学習会とか勉強会とかを一緒にさせていただきながら、特に、私自身が調査を明確にしたというのは 1 回だけです。共同代表の松井さんと滝口さんのお二方にインタビューをして、その報告を大学の報告書のほうに書かなくてはいけなくて、そういったことで 4 ペ

一じぐらいのものをまとめて、そして書いたものを見てもらってというふうにやりとりをして。それから授業に来ていただくようになって、ぷらほの説明をしていただいたり、若者支援の課題というのを説明していただいたり。あるいはワークショップのやり方、こういったところをご指導いただいたりというふうな形になっています。要するに、実際に調査に通っているのは私のゼミ生のほうになります。卒論生になりますけれども、そちらのほうが今まで3人から4人ぐらい、卒業論文でお世話になっているということになりまして。さらには授業の一環ということで、見学に今数十名、昨年などもお世話になっているとそういうふうな関わりということにもなっています。ただ「油断できない」というのが、これがまさに私どもの感覚でありまして、先ほどのカテゴリー化の暴力のお話でいいますと、私がこういうふうに表示したことがあります。ぷらっとは一むの活動の中で面白いと思いましたが、市長選とか、県議会選挙、県議会選でしたか、それで候補者の方に来てもらって討論会、それも偏っているんじゃないくていろんな方に声を掛けて、できれば全員に、全員に声を掛けていたんですよ。

滝口：候補者全員に呼び付けて、話を聞いてくるという。若者支援の団体なので、「若者の現状」についてどう思っているのかを全員に聞いて、それを、ちょうどインターネット選挙が解禁された時だったので、それを全部動画で撮ってネットで配信するということをやった。

安藤：ユーチューブ等で流しているというふうなことは、まさにこれが望ましい政治教育だなというふうに思ったり。こういうことは公民館ができていないんじゃないかというふうなことを思ったり。そしてあと、作っている冊子ですけども、これがリソグラフで印刷しています。リソグラフというのは、ガリ版の発達版です。そしてこの作文とか、そういう絶えず冊子で作るところも非常にこの「生活記録みたいだな」というふうに自分の研究に引き付けて、そして「公民館ができないことをやっている民間の公民館だ」みたいなことを言って、滝口さんの顔が引きつっているような、そういう雰囲気が出ているやりとりで、こういうところがつまり自分のカテゴリー化の暴力だったのだらうと感じますが、そういったやりとりというのをしてきたということになります。ですから、2人ともいがみ合っているようなことではなくて、緊張感を持った関係というのが多分この両者の関係であるんだろうなというふうなところは思います。昨年10月、生前葬というふうに言って解散記念パーティーをやってしまいまして、その乾杯の音頭を私がやりました。そして、乾杯の音頭をして10分で妻の調子が悪いんで帰ったというそういうようなところで、あまり料理を堪能せずに帰ったところなんですけれども。そういうような関係だということになってまいります。それで、あんまり中の話だけであれなんです、私は特に民俗学の出身でありますので、文化人類学の民俗学の専攻でありますので、その中で1990年代、自分が大学に入った時によく読んでいたものというがあります。『現代日本民俗学』という本の、三一書房で出していた本だったんですけども、その1巻、2巻に挑戦的な文章を集めたものがあるんですけども、その中

にあったのが宮本常一の『調査地被害』という 1972 年に書かれたものなんです。有名なのは尋問調査。その人文（じんぶん）をじんもん（尋問）と読んで、絶対にこれはこういうのがあるはずだというふうなことで民俗学者が尋問をして歩いていると。だから人文調査ではなくて、尋問調査だというふうな、そういうふうなことを現場の声を拾いながら言ったり、あるいは搾取的な調査、あるいは借りたものを返さないとか。そしてあとは、当然のことながら書いたものを地元の方のチェックなどを受けずに出してくというふうなもの、そういったことを非常に考えなきゃいけないということで 1990 年代われわれが読んでいたものでした。最近また 2008 年に宮本さんの影響を強く受けたのが安溪さん、安溪遊地さんという方が『調査されるという迷惑』という本を出されていますけれども、主に文化人類学、開発人類学とそういった立場での調査地とのコンフリクトの様子を示されているということもあります。その時に、何て言えばいいのかなと思うんですけれども、教育学のフィールドワークというのが、教育という言葉が既に乗っかっているというところのいいところ、悪いところがあるなというふうに思うときがあります。ですから、社会教育の研究者であるというふうなところで連絡を取っていくとき、やっぱり教育という営みというものを前提に考えているとか、評価していつているんだろというふうなことが明確に分かるというところがありますけれども、ただそれによって「教育の」とか「次世代の養成の」というふうな言葉でからめとってしまうという、現場の方が言えない部分というところですかね、そういったことを封殺してしまうこともあるんじゃないかなということを、改めて今日のお話を聞きながら考えるとところはあります。私だけしゃべってしまったのでまた後ほど。

秦：ありがとうございます。安藤さんの教育学のフィールドワークに関することや先ほど滝口さんが「コンフリクトがない調査はないんだ」ということをおっしゃっていたと思うんですけれども、カテゴリーを持ち込み、認識枠組みを研究者が現場に持ち込むということに対して、調査される側がそれは暴力だというふうに受け止める。コンフリクトは避けられないとおっしゃったんですけれども、そのあたりをもう少し滝口さんから少し補足をしていただければいいのかなと思います。お願いします。

滝口：自分の立場がやっぱり曖昧というか、研究をする側になったりもするし、される側になったりもするしというところで、ゆるい言い方になってしまうのかなという思いもなくはないんですけれども、やっぱり文脈が違うものが出会うというときには、絶対そこにコンフリクト、摩擦とかずれは生じざるを得ないと思うんです。で、それが不幸な形にならなければいいんじゃないかという思いがあって。じゃあ、どういうふうな出会い方が許容可能な範囲なのか、どういう出会いだったら歓迎されるのかみたいなところを考えていく必要があるのかなというのと、そもそも先ほどの問題の立て方の「研究者はいかにすればコンフリクトを回避できるのか」という話は、私から言わせると「研究者だけが努力すれば変わるのか」という話で、結局現場と研究者がある意味協働構築していくものではないかと思うんです。多分それは現場のほうからでも、実践現場のほう

からもそういう状態に対して何をしなきゃいけないのかという問題意識をこちら側のほうでも受け取る話でもあって、それはどういうふうに両者にすり合わせをするかという話をしたほうがいいのかなど。ここは研究者の方々が集まる場でしょうから、それはまた違う話なんだと思うんですが、主語が研究側にあるのが何か違うんじゃないかというのが思うところです。

秦：ありがとうございます。社会学の好井裕明さんが「カテゴリー化する私の営みが調査する私にとっては回避し得ないものだ」というふうにおっしゃって。まさに滝口さんが先ほどコメントされたことと重なっていくんだと思うんですけども、やはり、例えばぷらっとほ一むであれば、困難を抱えている若者たち。問題が現場にあるわけですね。その問題を抱えて生きているあなたの具体をとらえるために調査する側の問題が、あまり自覚的になっていないのかなという気がして、この企画を立ち上げたわけです。もっと問題とそれから問題を生きるあなたに真摯（しんし）に向き合う研究者の姿勢というのが問われているのではないかなと。好井さんの論考を読んでいて、私はそう思いましたし、滝口さんのご報告を聞いていて、そういうところがわれわれに求められているはずなんだと。主語が偏っているというのはまさにそういうところじゃないのかなと思います。それに対して何か付け加える点がありますでしょうか。

滝口：うちの活動とか若者の居場所というふうな話をする場合「ひきこもりの人が来ているんですね」というふうな、そこで既に事前の構築があるわけですね。ひきこもりの人がいるなんて一言も言っていないのに、もう「居場所をやっています」というと「ひきこもりの若者が遊んでいる場所ね」という、そういうものを持ち込んでくるんです。あと、そのフィルターが入っているんで、そこに来ている人たちは「ひきこもりの若者」というふうにししか見えなくなっている。だから、むしろわれわれもそうですけれども、支援団体もそうですけれども、「ひきこもり」という現実そのものを、カテゴリーそのものを今つくっているんだよと言いたい。そこの予断を外してまず現場に入ってほしいなという感じなんですけれども。だから「あ、この人はまともな研究者だな」とかというふうにこちら側が判断するときに、何を見るかということ、最初にそういうものを持ち込んでも、例えば「ぷらっとほ一む」で行われている何かを見たときに、そこの流儀に反応して「ここは、それはちょっと置かなきゃいけない。それはちょっと外してまずこの現実を見よう」みたいにモードチェンジをする方がいます。しない人がいます。そこは多分われわれのほうで判断します。モードチェンジをするのかしないのか。

秦：モードチェンジをもう少し分かりやすく説明していただけますか。

滝口：その持ち込んだカテゴリーみたいなものが当てはまらないみたいなことを、こちらのほうでもいろんなコミュニケーションの中で使い分けをするわけですね。つまり「あなたは「ひきこもりの若者」を前提として今そこでその来ている若者を見ているけれども、別に彼はひきこもっていないですよ」みたいな話をするわけですよ。「でも、基本的にベースになっているのは、ここは「ひきこもりの若者の居場所」というそういう実践

ですよね」みたいな形で、こちら側が定義したリアリティのずれとか亀裂みたいなものにふたをするみたいにやって、持っていくというふうなケースのほうが割と頻繁なのかなという感じなので。

秦：ありがとうございます。そうしましたら、用紙がだいぶ集まってきましたので、質疑の時間に入りたいと思っています。会場からの質問です。まず事実確認の質問が来えますので、読み上げたいと思います。「実際の正会員のクラスターは？」と書いてあるんですけども、これは学生、社会人、10代、20代とか、つまり属性でしょうか。分かる範囲でお願いします。

滝口：今にお答えしていいですか。来ている人たちは20代、30代が中心という感じ。あと時期によって随分と入れ替わる。ある時、中学生の子たちが何人か来ると、その子たちに引きずられるんでその辺で入ってくることもありますし、本当に時期によって随分変動があるんですが、基本は若者、20代、30代が多い場所というふうなイメージでいいのかなと思います。

秦：同じ方ですけども、先ほど「テーマ・コミュニティ」というのが出ていたと思いますけれども「テーマごとに中心メンバーやプロジェクトをつくったのですか」ということですね。「また、それぞれのプロジェクトは正会員を中心に進めていったのでしょうか」質問が来ております。

滝口：最初の質問をいいですか。

秦：「テーマごとに推進メンバーやプロジェクトをつくったのですか」です。

滝口：そうですね。そのテーマごとに実際のスタッフは、昨年度でいうと、6人で動かしていたんですけども、その6人はそれぞれ関わるプロジェクトが、テーマ関係が違うみたいな形で、それぞれで動いている。同時進行でいろんなのが動いているという感じです。スタッフだけでなく、どちらかというと、うちの団体はそれで食っている人間が誰もいないので、基本的にみんなはボランティアで関わるみたいな形です。ですので、若者たちが要はずっとそこに自分たちの居場所とかそういう場所として関わっていて、その関わり方が深くなっていくとだんだんスタッフ的になってくると、そういう場所のつくり方なので、私もほとんど把握できていない「テーマ×コミュニティ」も実はいっぱいあります、という感じです。見通しが付いていないという。

秦：それから3番目ですけども、大人が若者に関わるときに、意識していることは何でしょうか。

滝口：何でしょうね。ちょっと「おまえは、それはないだろう」と言われるかもしれないですけども、活動を始めたころには私はまだ30代だったんですね。今もう、45ですけども。その時の若者の当事者として若者たちと関わるみたいなのをずっと引きずっている感じがあって。あまり自分らのことを大人というふうに意識していないかもしれないです。

秦：それは滝口さん自身に関わることですか。あまり意識していないというのは、例えば

若者支援に関わるきっかけになったことということも影響しているのでしょうか。

滝口：要するに、地方都市に暮らしていて、面白いことが何もないみたいな感じがベースとしてあって、「何か面白いことないかね」といってつくったのがこの場所なんです。なので、やはり支援団体で支援するために、不登校で大変な状況の子たちを支援するためにという入り口ではそもそもないんで。あまりそういう「大人として」という意識が希薄なのかもしれないと、今ちょっと聞かれて改めて思います。

秦：4 番目ですけども、これは今回の研究会の主題かと思えますけれども、大人と若者との間に生じたコンフリクトの解消法について、具体的に教えてほしいということです。

滝口：多分、「解散」です。これが「解散」だと思います。要するにもう若者という、同じ当事者のアイデンティティみたいなものは持てないということを、ここ数年ずっと感じていまして。というのは私ともう 1 人の共同代表がかなり権力を持ってしまっているんですよ。言葉の権力というか、普通にわれわれがしゃべって、今までと同じようにふざけてしゃべっているつもりなんだけれども、若者たちの取り方が違って、あの活動を動かしてきたあの権威みたいな、長老みたいな 2 人が言っているから、これは付度（そんたく）しないと、言うことを聞かなくちゃみたいな形ですごく委縮しているという現実がずっと最近あって。これはもうわれわれがいないほうがいい。さっさと消えたほうがいいなということで、私たち共同代表が団体を抜けるというふうなことも考えたんですけども、無責任だなというか、重たい荷物を若い人たちに置いていくの。これはもう自分たちの元でいったん解散をして、残ったいろんな資源とか概念とかがあるので、それを使って次の人たちに自由に活動してもらおうと思って解散して、全く終わったわけじゃなくて、今、後継グループが 3 つぐらいあって、その後継グループがそれぞれ活動し始めているというのが、今年の 4 月からの動きなんです。というのが多分、自分たちの中の答えなんだなと思っています。

安藤：よろしいですか。これは、やはり 7～8 年前ですか、山形大で学習会をやった後に、夜中の駐車場でしゃべった件なんです。だから今、若い、自分たちも若者の 1 人として関わっている前提でやっているんだけど、これから 5 歳、6 歳、7 歳、8 歳年を取ってくる、われわれがおっさんになったら、2 人とも、私のほうが 1 歳年上ですけども、当時、30 代の半ばか、過ぎぐらいでしたので「どうする？ どうなんだろうな」ということで、自分の研究で、専門家とかも 10 年周期ぐらいで活動の●というところ、そういった知見もよく僕は言っていましたんで「どうするんだろう」というふうに言ってきたというところがある。その中で、若者じゃなくなってきたというところが、そこがやはり 1 つの活動を閉めるときの理由だったというふうに思うんです。そういうやりとりをこの前もしたという記憶がありますので。補足でした。

秦：ありがとうございます。じゃ、その 4 番目にも関連していることですけども、調査者が現場に入ったときに、調査される側の現場の若者たちが調査する側をどのように見ているのかということ、ご質問があるんですけども。お願いします。

滝口：もう一度いいですか。

秦：若者は調査する側の人をどう見ているのでしょうか。

滝口：多分、それぞれの見方があると思うんですけども、先ほど話したことは私個人のいうよりも、団体の中でいろいろ議論をしたり、しゃべったりした中で出てきたものに関わっていることなんで、拒絶的な見方をする場面もあるし「これは遊んでやれ」というような見方をする場合もあるし、そこはさっきの3パターンの捉え方ですね。答えになっていますか。

秦：はい。質問をされた方、いいでしょうか。同じですね。調査に入った後の現場の対応ですけども。調査される側のプライバシーに関わることも重要なと思います。個人情報保護について工夫されていることとか、特に研究者に求めることはどのようなことでしょうかという質問です。

滝口：一般的に考えると「こういうところでこういう活動をします」とか「こういう形で使います」というのが事前に教えてほしいなということと、あと、もし出す場合は出すタイミングでどういう形で出すかということと、ちゃんと現場に還元、見せてほしいなと。それを見た上で「ちょっとこれはニュアンスが違う」とかというやりとりも含めてお互いに多分そういうプロセスが必要かなという感じはするので。というぐらいですかね。

秦：1つ飛ばしてしまいました。失礼しました。2番目ですけども、研究者やマスコミは、結果の発信前に結果を見せてやりとりをすることはありますか。

滝口：これは、最初は求めていたんです。結構変なことを書かれたりとか、特にメディア、新聞記事とかですごい言っていないみたいなことを書かれることもあって「全部見せろ」みたいなことを言っていた時期があります。で、記者はもちろん報道する自由というものがあるので「それはできません」という人もいれば「まあ、しょうがない。こっそり見せますよ」と見せてくれる人もいれば、それぞれですけども、ある時期からそれはやっぱり違うなというふうに自分たちのほうでも感じる部分があって。やっぱり自分たちの宣伝をしてほしい、でも完全に宣伝になることはないわけで、そういう意味ではむしろ自由というか、新聞記者の人とかマスコミの切り取り方で、面白い切り取り方をしてもらったほうがわれわれにとってもいいのかな、みたいな気付きがどこかであって。なので、最初は割と「見せろ」と言っていましたけれども、あまり言わなくなったかなと。だからやっぱりインタビューとか調査の段階で「この人に書かれたらめっちゃくちゃになるな」みたいな場合は「事前に見せてもらっていいですか」みたいなコミュニケーションはすると思うんですけども、そこはだからプロセスのところでできた信頼関係によって変わるかなと思います。

秦：その2番目の質問に関連しますよね、表に出てしまうことで現場のトラブルになることはないのか。要するに、現場で起きていることが外に出ることによって、現場でトラブルになることはないのかというご質問です。

滝口：あります、あります。ありますが、どういうトラブルかですよね。難しいんですけども、本人が取材を受けたり、写真を撮られたりみたいな場面では「いいよ」と言っていたけれども、それが表に出た時に結構それを見た人たちが「あんなふうに乗ったらあなたの人生にダメージがあるよ」みたいに、その後いろんな形のコミュニケーションがあって、その結果最初に OK した件が覆るみたいなことは、普通にありますよね。そういう感じかなというふうに思いますけれども。あとは、先ほどの付度みたいな部分で「いいよね」みたいな形でゆるい聞き方をして「いいよ」というふうな言い方をしたときに、結局「あの時は、本当は嫌だったんだけど、ああいうふうに言われたからやらざるを得なかった」という形で付度させてしまったみたいなことももちろんあります。それはだから聞き方とかをすごく丁寧にしなきゃいけなかったなと、反省はいっぱいあるんですけども。

秦：それは調査される側のバイアスがどんな現場でもあると思いますけれども、こういうふうにしたほうが、表に出ていくのであれば、いいだろうという判断が入ってしまうということですよね。それを調査する側が見抜くことが求められているはずなんですけれども、メディアは意外とそれをそのまま書いてしまったり、伝えてしまったりということがありますか。

滝口：それもコミュニケーションなんですよね。攻撃したくて攻撃してくる人もいるんですよ。難しいですけども「おまえの団体は、当事者の、利用している社会的弱者の人たちの顔を表に出すのか。あの子にどんなこれからのダメージがあるのか分かっているのか」みたいな形で、そこを狙ってくるみたいな部分はあって、そういう形の中で問題になるみたいなことは、割と日々にあるんですけども、そこはむしろそうやってモザイクを掛けたりしないことが自分たちの倫理だと思ってやっている部分なので、ここは別にそういう特殊な場所でもないの、普通にいろんな人が来て、コミュニケーションをして楽しんでいる場所だと。だからそこをひきこもりの若者たちが集まっている場所に、そんなふうに出して載せたらどうなるかというカテゴリー化を、そんなふうには1回されているわけです。というのに対して、どう抵抗すればいいのかなというのが、なかなか難しいな。彼らが言う理屈も分からないでもないけれども、実際そういうことがおこり得るかもしれない。で、どういう価値を選択すればいいのかというのはやっぱり迷う部分はあります。

秦：すみません、まだ続きがあるんですが…。メディアとか研究者が調査に来た時に、若者が少し自分をいいふうに伝えたいというようなことが起きるんでしょうか。

滝口：ま、それはもう私は聞けないですよ。もう関係性があるので、さっき言った「代表が基本的にこういうことを考えているんだったら、それに沿ったことを言ったほうが団体的にありがたいかな」みたいな気の回し方をする子たちもいるわけです。だから、そういうコミュニケーションとかそういう日常の関係性みたいな部分があるので、私が実際に若者たちの調査をしているといっても、拾えているリアリティは本当に限られてい

る。だからむしろそこを先ほどの死角という話ですけれども、研究者の方から、むしろそこを見てほしいなという。それで「何だ滝口、おまえは言っている話と全然違うんじゃないか」ということももちろんあると思う。そうやってもらったほうが正確かなという気がするんですよね。私が今、先に代弁している感じがあるんですけども、私の切り取り方ですけれども。

秦：では、次に行きたいと思います。安藤さんもしコメントがあればお願いします。現場に入る入り方ですけれども、研究者が調査者であることを隠して一参加者としてこっそり参与観察を行う場合があるというのを、どうお考えですかという。これは、滝口さん、まずお答えいただけますでしょうか。

滝口：でもそれは現場からいうと、見破る、見破りたいなみたいな。見破れなかったら「やられた」という感じですね。それは答えとしてひどいですか。いや、ちょっと分からないんですけども、これを否定したら、ジャーナリズムとかが成り立たない気がするんです。ブラック企業に潜入して書くみたいなのは普通にあると思うんですが。だから滝口がいた「ぷらっとほ一む」というのはやばいようだからそこに潜入して実態を暴くというふうな人がいてもおかしくないと思います。それを、私は団体の運営者なので、そういう人が入ってこないようにいろいろ注意をして見ている。若者たちも注意をして見ている部分はあると思いますけれども、そこはだからせめぎ合いになるのかなという感じがします。

秦：安藤さん、どうぞ。

安藤：もっと若いころに、やはり参与観察とかいろんなことを考えて、立場を隠して入って、その青年団の活動を一緒にやるというようなことをやってみたことがあるんですけども、どうせ途中でばれまして。だって、何ていいますか、身体的な特徴その他を含めてですけども、一般じゃないというところで、結局は身がばれてしまうというようなことで。その反省もありまして、要は最初からストレンジャーとして入るということ、むしろそのほうが逆に分かることが多いということを感じました。後輩が大学で一時そのように目的を言わずに調査地に入っていって「何しに来ているんだ」と通報が来たことがありました。だからそれよりはむしろ自分が調査者だと言って、ストレンジャーであるというふうに入っていっただきのほうが、かえって突っ込んでいけるというふうなことでしょうか。そういうことを逆に感じたということがあります。当然、やっぱり発表していくということを考えたときに、どこかで身を明かすとかという「実は」なんていうことで、こう破ればSの字が出てくるような感じで助けてくれるならいいんですけども、そうはいかないということですので、やはり事実をはっきり、むしろ身分を明示したほうが逆に見えることがあるんじゃないかと、そういうそのコンフリクトがまた、滝口さんが言うとおりに、生まれるところがあるんじゃないかなという気が、感じるころであります。ただもちろん、ジャーナリズムの入り込むというふうなもの、入り込んだって分からないというふうな、暴き出すみたいなものというふうにすれば、それ

は必要だろうと思いますけれども、そうじゃないとすれば、むしろはっきり明らかにしていくべきじゃないかなというふうに、結果的に思うところがあります。

秦：ありがとうございます。完全なる観察者というのが、私は教育学の人間の中にはあまりないのではないかなと思っていて、やはり関わらないとそれこそデータも収集できないし。私が行っている小さな集落とかはよそ者が見ていたら、まず「あいつは誰だ」というふうな視線が飛んできますので、やっぱり現場によってはそういうことはあり得ないんじゃないかなと思います。時間がなくなってきたので、2 番目に移っていきますが。2 番目と 3 番目が共通しているのかな。アクションリサーチとしての滝口さん、研究者としてのご自身の現場との関係はどうですかということです。

滝口：これはすごい難しくずっと悩んでいるんですけども、自分が論文を、「ぶらっとほ一む」という実践の現場を使って論文を書くときは、歴史研究みたいな手法にならざるを得ないかなと思っています。だから、5 年ぐらい前のいろんなことをやった記憶とか、資料、こういうものを分析するみたいな形の書き方しかできないかなというのは、リアルタイムでインタビューすると、だいたい彼らは「団体にとってこれはどういうふうに言うといいのかな」と考えて、再帰的に答えをだいたいしゃべって、私がインタビューしても多分話は面白くない。あまり意外な話は聞けない感じがあって。私が自分の団体を研究する場合というのは、やっぱり資料分析が中心になるような気がします。一応そこで切り分けようかなと思っています。

秦：もう 1 つ、滝口さん自身に聞きたいことですが、実践家兼研究者から共同研究する意味は何でしょうかということです。

滝口：誰と共同研究をするんですか。

秦：実践家と専門の研究者が共同研究をする意味は何ですかということです。

滝口：お互いに死角があるので、お互いの死角を見せ合うみたいなことができるかなという期待はあると思います。実際はできるかどうかは分かりませんが。研究するというプロセスそのものを記述するというのが面白いのかなと。そこでおきている現象とは何だろうと考えていくこと自体が、非常にいろんなものを再帰的に、再帰性みたいなものを捉えるときに役立つだろうと思ってます。入り込んでいるその場所で自分が何をしているのかというのは自分だけではなかなか見えづらいので。研究者には「私たちからはあなた方はこう見えていますよ」と鏡としてわれわれが何かデータを提供できるかもしれないし、逆に NPO の現場からしても、自分たちの姿はよく分からないけれども、研究者の目に映ったイメージを教えてもらって、お互いさま、死角を見せ合うことができれば、いろいろ面白いことが見えてくるのかなという期待があるということですかね。

秦：最後にコンフリクトの解消に向けた提案の 3 つ目です、3 番目ですね。研究者の存在によって現場が発見できないような死角を見つけてもらうという補完関係なんですか。4 番目は、暴力化しない対話的コミュニケーションが成立する条件があるとすれば、

どんなことがあり得るでしょうかという質問です。

滝口：1 つは継続かなと思うんです。とどまってもら。ずっととどまるのは無理にしても、ちょっととどまってほしいなと。というのは「あなたはあそこで何を見て、それをどういうふうに記述して、誰にどう発表したのか」みたいなところをわれわれに対し、そういうものを見せてくれて、それに対してわれわれがこういうふうに、現場の側がどういうふうに反応をするかみたいなそういうコミュニケーションを取ると、そういうやりとりをお互いにやれるくらいのタイムスパンでそこに継続して関わってほしいなという期待ですね。やっぱりこういうのは、最初の出会いはやっぱり暴力的になりそうな現場もあると思うんですけれども、そこはしょうがないかなというふうな気もするんですけれども、それで、持っていきたいものだけを持って行って、いなくなっちゃったら、こちらが何も投げ返せない。だから投げ返せる場所にいてほしいという感じです。

秦：次のテーマですけれども、調査者を利用する、現場の後押しとなる言説や政策推進があるのでは（団体自体というより領域や業界を取り巻く環境を変えることができる）ということですか。

秦：ちょっとイメージが湧かないですか。補足的に書いてあるのは、その団体というよりも、領域や業界を取り巻く環境を変えること。

辻：もしよかったら、質問者に。

秦：ちょっと分かりにくいので、もしよかったら、これはお名前が書かれていないんですが、どなたがご質問されたんでしょうか。

添田：すみません、関連した質問をよろしいでしょうか。滝口さんの実践は制度の間というか、あえて制度に位置付かないような実践ですが、制度化を志向するような場合には、政策を後押ししたり、自分たちの取り巻く環境を変えていく運動的な側面があるのではないかという質問が届いてます。

滝口：そうですね、それは、一般的にそういう形でキャリアをつくってこうというふうな団体のもとでは普通にあるだろうと思います。

秦：よろしいですか。最後の質問にいきいたいと思います。これは先ほども出てきたような気もするんですが、活動現場の死角の可視化をもう少し具体的に教えてくださいという質問です。

滝口：繰り返しになってしまうかもしれないんですけれども、例えば私は今、自分の実践現場を研究のフィールドにしていると。でも、私には絶対に見えないものがあると。それは私が直接関わって支援というふうな形でコミュニケーションをしながら、関わっている若者たちの実際のところは分からないんですよ。そういう立場的な部分で見ることができないという問題があるので、そういうところは多分検証しなきゃいけないと思いますね。「本当に滝口の言う通りなの？」という。第三者の「本当なの？」というふうな目が入って初めて「ああ、本当だったな」「いや、いんちきだった」とかそこは言えるのかなと。そういう死角がまずあると。難しいのは、多分そのままそれを外の研究者が

来て「利用している若者たちは本当はこう思っている」みたいなことをやってそれを暴露するみたいなことになると、団体内のコミュニケーションとかをめっちゃめっちゃにしちゃう可能性があるわけですね。そこら辺でだから難しいなと思うんですが。抽象化して、その個々の人間関係そのものじゃなくて構造的な問題、抽象的な、抽象化を得た形で考察してもらおうということをやっていたいただければ、生かし方が1個あるのかなという感じですかね。私には距離が取れない、われわれはその現場の中に巻き込まれていって、距離が取れなくて、対象化できないとか、当たり前過ぎてできないというところがいっぱいあるので、それはそういう形で関わっていただければすごくありがたいのかなと思います。

秦：そうですね。現場の人間関係がずたずたになるような調査というのは慎むべきことではないかと思います。もう少しお話をしていきたいですが、時間がそろそろきましたので、これで終わりにしたいと思います。まとめませんけれども、調査する側とされる側の固定した対立関係を乗り越えて、滝口さんの言葉を借りれば、「協働の対等のパートナー」としてやっていく、それが新しい地平を開く道になっていくのではないかなと、今日、滝口さんのお話を伺いまして、また、会場からのご質問を受けた滝口さんのコメントを聞いて、そのように思いました。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

<司会>

高井：3人の皆さん、本当にありがとうございました。拍手でお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。短い時間で、語り切れない、整理し切れなかったおと思いますが、お許しいただければと思っております。ご参加の皆さまにおかれては、今回の研修会の趣旨をご理解いただいて、これからの活動、研究に生かしていただければと思っております。また、滝口さんが『若者たちはヤマガタで何を企てているのか？～ポスト3.11の小さな革命者たちの記録～』というご本をお書きになっています。書籍のコーナーで販売しておりますのでぜひお立ち寄りいただければなと思っております。自分にとって必要なものだけを持っていく、ということではなく、やりとりできる機会をというお話もありました。そうしたご意見を受け止めて、ぜひまた考えていければならないと思っております。会場の皆さんも含めて本当にありがとうございました。以上で閉会いたします。